

《巻頭言》

一身独立して一国独立す



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

福沢諭吉の『学問のすゝめ』と言えば、その書き出しにある「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」が有名である。この名句は当時の若人の琴線に触れ、初編だけで20万部のベストセラーとなり、第17編まで続き、明治初期の日本人の10人に1人が読んだと言われている。但し、最後に「と言えり」というフレーズがあるように、これ自体は福沢が編み出したものではなく、西洋においてそう言われてということである。

同じく『学問のすゝめ』の中に出てくる「一身独立して一国独立す」も、屢々引用される成句である。この言葉は1869年2月2日、福沢が後に慶應義塾医学所校長となる松山棟庵に宛てた書簡の中で初めて登場した。そこには「小生敢て云う、一身独立して一家独立、一国独立、天下独立と」とある。儒教の根本経典『礼記』に記された「修身齐家治国平天下」に通ずるものがある。何より国民自らの自立が国の自立の基礎を成すと考えたのである。これこそ欧米列強の蚕食から日本を救う最善の道であるとした。

福沢には蘭学者、啓蒙思想家、ジャーナリストと、いくつもの顔があった。しかし、一般的には教育人としての側面が広く知られている。慶應義塾を始め、専修学校、商法講習所、神戸商業講習所、土筆ヶ岡養生園、伝染病研究所の創設にも尽力し、「明治6大教育

家」の1人に数えられている。学問こそが福沢の「独立自尊」の真骨頂であり、これによって日本の近代化が図れると信じたのである。

興味深いことに当時は未だ男尊女卑の気風が残っていたが、『学問のすゝめ』は驚くほど女性に対して紳士的な内容である。即ち「一身独立」の対象には女性も含まれていた。そうでなければ「一国独立」はないとの思いがあったのであろう。自叙伝『福翁自伝』で福沢は「世間では男子が生れると大層めでたがり、女の子でも無病なればまずゝめでたいなんて、おのずから軽重があるようだが、コンナ馬鹿げたことはない」と述べている。実際、福沢は次女の房、三女の俊、四女の滝に英語を学ばせるためミッションスクールに入学させている。ただ、年頃の娘が急に3人も自分の元を離れたため、寂しさの余り呼び戻してしまったらしい。かなりの子煩悩であった。

アメリカでは日本に対して自立的な防衛力強化を促すトランプ政権が発足した。「一身独立して一国独立す」とは何かを思索する好機ではないか。それだけではない。経済再生、財政再建、地方創生、女性活躍、TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)、憲法改正…。全ての核心が、この「一身独立して一国独立す」の中にあるような気がしてならない。